『決定往生集』訳註（一）―序論・依報決定―

服部純啓

【抄録】

本稿は、珍海（一〇九二～一一五二）撰『決定往生集』諸本のうち現時点では最良の本文を提供するとみられる、奈良県立図書情報館所蔵「元禄九年版本」の、序論と第一依報決定の訓読と現代語訳である。『決定往生集』の諸本については、坂上雅翁「『決定往生集』諸本攷」（『淑徳短期大学研究紀要』第三〇号、一九九一、淑徳短期大学）等を参照されたい。また、坂上「禅林寺本『決定往生集』の研究（一）～（三）」（『淑徳短期大学研究紀要』第三一～三四号、一九九三～一九九五）において「禅林寺本」の翻刻、訓読がなされているが、管見の限りでは、本稿が現代語訳を試みるものとしては初めてである。作業の過程で佛教大学、本庄良文教授に週一回の訓読、現代語訳の読み合わせ、添削のご指導を賜った。また佛教大学、南宏信先生には、本稿の構成についてご指導を賜った。また、奈良県立図書情報館には、貴重な資料の閲覧、複写を許可頂き、本稿掲載に関しても格別のご配慮を賜った。御礼申し上げる次第である。今後、第二正果決定以降の続編を寄稿予定である。

キーワード：珍海、『決定往生集』、元禄九年版本、序論、依報決定

【凡例】

一、底本（㊀）は奈良県立図書情報館所蔵、「元禄九（一六九六）年版本を使用する。

一、校本には下記の資料を用いた。

㊁：寛文五（一六六五）年版、（※宝永七（一七一〇）年版も同じ版木であるため本稿では記載しない。）

㊦：『大正新修大蔵経』第八四巻所収本

㊇：『浄土宗全書』第一五巻所収本

一、本稿は、上段から校異、訓読、現代語訳の順で掲載する。

一、末尾に底本の複写を添付する。底本の下部には丁数（〇丁右、〇丁左）を記載する。

一、問答箇所は、現代語訳に【問】・【答】と適宜記載した。
一、底本に基づき旧字は改変せず訓読を行ったが、異体字は環境の許す限り正字に改めた。現代語訳には原則常用漢字を使用した。
一、捨て仮名は基本的にそのまま記載した。
一、『決定往生集』本文中の引用経典に関しては、坂上雅翁「禅林寺本『決定往生集』の研究（一）・（二）・（三）」（前掲）を参照したが、『大正蔵』の典拠のみ示されているので、『浄全』の対応箇所も併せて表記し、参照箇所には〈坂上〉と付記した。
一、割注などの文字の小さい箇所は〈　〉で括った。

①寛浄「＋巻上」
②底「沙門珍海撰」寛大浄欠く。
③寛大浄「共」
④大「＋文」

（一丁右）決定往生集①　沙門珍海撰②

決定往生と言ふは、是れ浄教の宗旨なり。夫れ西方浄土の道は経論同じく開き、稱念彌陀の行は愚智俱③に従ふ。まことに以れば、時に契ひ、機に稱ふが故のみ。然るに或は知りて而も趣かず、或は趣きて而も進むこと莫きは、卽ち予が如きの流[1]なり。豈に其れ痛まざるべけんや。所以に今、文理を考尋して、將に疑滯を流さんと〔して〕、心を決定往生に安んじて快く終焉の來迎を期せんと欲す。まさに知るべし。世俗の凡夫、念佛の（一丁左）行を修して、此れより卽ち安樂世界に生ず。「今、經を聞きて去ることを求むること有らん者は、定んで往生を得ることを明す。自ら疑慮すること莫れ[2]」と云ふが如し〈浄影雙卷經の義記④〉。

決定往生集　沙門珍海撰。

決定往生というのは、浄土教の宗旨である。さて西方浄土へ至る道は経、論に同じように説かれ、阿弥陀仏を称念する行は愚者も智者も共に従う。よく考えてみれば、これは時代にかない機根に適しているからである。ところがこれを知っていても〔その道に〕向かわない者や、向かっても進まない者もいる。それは他でもない。私のような者である。何と痛ましいことであろうか。ゆえに今、〔経論の〕文言と道理とを考究し、疑惑を払いのけようとして、心を決定往生に定めて、心静かに臨終の来迎を待ちたいと思う。知るべきである。世俗の凡夫も念仏の行を修めてこの世界から安楽世界に往生することができると。「今、経を聞いて往生を求める者は、必ず往生できるということを明らかにする。みずから疑ってはならない」と言う通りである〈浄影寺慧遠『無量寿経義疏』〉。

⑤寛大浄「但」
⑥大「＋文」

又言く、「上み現生の一形を盡し、下も臨終の十念に至るまで倶⑤に能く決定して皆往生を得」と〈慈恩要決⑥〉。

凡そ卷を披き文を看るに、「決定往生」と云はざるは無し。西方の行者、知らずんばあるべからず。方に[4]今、三事を以て、其の決定を示さん。一には教文、二には道理、三には信心。此れを三と謂ふ。

初めに教文とは、『稱讃淨土經』に稱名の利益を説きて云く、「一切定んで無量壽佛の極樂世界に生ず[5]」と。

『觀無量壽經』に想觀の利益を説きて云く、「必（二丁右）定してまさに極樂世界に生ずべし[6]」と。又『起信論』に經を引きて云く、「若し人、專ら西方極樂世界の阿彌陀佛を念ずれば、卽ち往生を得[7]」と〈云云〉。既に「決定」と云ふ。復た猶預すること莫れ。又「卽生」と言ふ。必ず別時に非ず。又三輩九品、竝な「卽生彼國」と云ふ。此に由りて應に知るべし。經と論と、皆、「此れより決定往生す」と説けり。教文多しと雖も粗ぼ二三を示すのみ。

またいうことには、「最大限、現世の一生涯を尽くし、最低限、臨終の十念に至るまで、いずれも必ずみな往生することができる」と〈慈恩『西方要決』〉。

おおよそ〔経、論の〕巻物をひもとき、文言を見ると、「決定往生」と言っていないものはない。西方を目指す行者は、知らなければならない。まさにいま、三つの事柄によってその決定〔の意味〕を示そう。第一には教文、第二には道理、第三には信心である。これらを三つの事柄という。

はじめに教文というのは、『称讃浄土経』に称名の利益を説いていう。「すべての者は必ず無量寿仏の極楽世界に往生する」と。

『観無量寿経』に観想の利益を説いていう。「必ず確実に極楽世界に往生することができる」と。また『大乗起信論』に経典を引用していう。「もし人が、専ら西方極楽世界の阿弥陀仏を念じると、ただちに往生することができる」と〈云々〉。現に「決定」と言っている。また疑ってはならない。また「即生」と言っている。決して遠い将来ではない。また三輩九品にはみな「即生彼国」と言っている。これによってあらゆる経、論には、「この世界から必ず往生する」と説かれていると理解すべきである。教えの文言は数多いが、およそ二・三例を示すのみである。

⑦寛大浄「即」
⑧寛大浄「即」
⑨寛浄「是」
⑩寛浄欠く。
⑪寛大浄「即」
⑫寛浄「咒」
⑬底「大」寛浄「欠損」
⑭寛浄「沉」
⑮底「其」寛浄欠く。
⑯寛浄「乎」

次に其の道理とは、夫れ善悪の両道は猶ほし掌を反すが如し。仰ぐときは則⑦ち寶刹に昇り[8]、覆ふときは則⑧ち泥犂に入る。良に以れば衆生自ら[9]出離の分有り。浄土は正しく是れ物を引くの方なり。若し凡愚⑨卑劣にして往（二丁左）生に堪へずと言はば、則⑩ち衆生は終に出離の期無く、諸佛は便⑪ち引物の功を闕きなん。定んで知んぬ。教に依りて願生せば、必ず往生を得てん。又生に九品有り。何ぞ自ら下劣を憚らんや。

因を十念と言ふ。更に怯弱を致すこと莫れ。因小果大は是れ内外縁起[10]の常の理なり。何ぞ一日の修因を以て七珍の浄土に生ぜざらんや。又復た諸法に皆な勢分有り。火の燒き、水の浮かめ、及び呪⑫藥の病を除き、光明の闇を卻[11]くる等の如し。佛の大⑬悲願力自ら沈⑭重の衆生を擧ぐるの功有るべし。豈に其⑮れ疑ふべけんや⑯。道理此の如し。

その信心とは、若し上の如き文理の（三丁右）中に於て、心に信受を生ずるを卽ち「決定」と名く。

次にその道理というのは、そもそも善と悪の二つの道は掌を返すようなものだ。上に向けるときは浄土へ昇り、下に向けるときはすなわち地獄に落ちる。実際考えてみると、衆生にはおのずから解脱の可能性を分有している。浄土はまさしく衆生を導く場所である。もし「凡夫は機根が劣っていて往生できない」というのであれば、すなわち衆生にはついに出離の機会はなく、諸仏は衆生を導く功能を果たさないことになろう。〔だから仏の〕教えに依って往生を願えば必ず往生できる、と確かに理解できる。また往生の仕方には九種類有る。どうして自ら劣っているからといって遠慮することがあろうか。

往生の因を「十念」と説いている。決してひるむようなことがあってはならない。小さな原因で大きな果報を得ることは内的と、外的との縁起の常の道理である。どうして〔わずか〕一日の修行の因によって七宝の浄土に生まれないことがあろうか。またあらゆる法にはすべて個別の決められた力がある。火はものを焼き、水はものを浮かべ、呪術や薬は病を取り除き、光明が闇を退けるようなものである。仏の大悲にもとづく誓願の力には重く沈んだ衆生を救い上げる効力があるべきである。どうして疑う必要があろうか。道理とは以上の通りである。

その信心とは、もし上述のような文言と道理に対して、心に信じ受け入れるならば〔それを〕「決定」と呼ぶ。決定というのは

⑰寛大浄「言」

「決定」とはこれ信の相なるを以ての故に。故に『觀經』に云く、「必ず淨國に生ぜんものは心に疑ひ無きことを得よ」[12]と。〈已上〉「無疑」は卽ち信なり。決定の稱なり。又信に由るが故に必ず往生を得。故に經に説きて云⑰く、「若し能く深信して孤疑無き者は、必ず阿彌陀佛國に往生を得」[13]と〈『鼓音聲經』〉。此に由りて應に知るべし。下輩の人、未だ一向專精に信受せずと雖も、而も暫信に由りてまた往生を得。此れ乃ち信心決定の義なり。

⑱底「人」大欠く。
⑲寛大浄「決定」
⑳底「皆」寛浄欠く。
㉑大「果定」
㉒底「於」大欠く。

此の文義に於て更に三種有り。一には果決定、二には因決定、三には緣決定なり。言ふ所の「果」とは是れ淨土の報なり。謂く、凡夫の人⑱、順次の（三丁左）生に於て、必定⑲して極樂世界に生ずることを得。故に經に説きて言く、「一念の心を發して無量壽佛を念ずれば、定んで彼の國に生ず」[14]と。〈『寶積經』の無量壽會の文〉是の如き等の文、皆⑳な果決定㉑を説く。

次に因と言ふは、是れ往生の因なり。謂く、淨土の業、若しは定、若しは散、卽ち此の身の中に於㉒て定んで成就[15]することを得。故に『觀經』に云く、「然るに彼の如來の宿願力の故に、憶想すること有

信の定義だからである。ゆえに『觀経』にいう。「必ず極楽浄土へ往生したいと思う者は、心に疑いのないようにせよ」と〈以上〉。「疑いのない」とはすなわち信である。「決定」の呼称である。また信に依るから必ず往生ができる。ゆえに経に説いていう。「もしよく深く信じて疑いのない者は、必ず阿弥陀仏の極楽浄土に往生できる」と〈『鼓音声経』〉。これに依って知るべきである。下輩の人は、未だひたすら心を専一に精進して、信じ受け入れなくても、暫信によってまた往生ができる。これがつまり信心によって往生が決定するという意味である。

この文言と意味にはさらに三種がある。一には果決定、二には因決定、三には縁決定である。ここにいう「果」とは浄土の果報である。つまり、凡夫の人は、次の生涯において必ず極楽浄土に往生ができる。ゆえに経に説いていう。「一念の心を発して阿弥陀仏を念じたならば、必ずかの極楽浄土へ往生する」と〈『宝積経』の無量寿会の文〉。このような経文は、すべて果決定を説いている。

次に因というのは往生の原因である。つまり浄土往生のための業は、もしくは定善であれ、もしくは散善であれ、この生涯におけるこの身において必ず成就することができる。ゆえに『観経』にいう。「ところでかの如来の宿願力によって、憶想する者は、

㉓寛「故必得成就」㊇「故得必成就」
㉔寛「尒」
㉕寛「弥」
㉖底「定」寛㊇欠く。
㉗大「賢護経也」

る者は必ず成就するを得㉓[16]」と〈云云〉。此れ想観して現身に成就することを明す。定善既に爾㉔り。何に況や散善をや。

次に縁を明すとは、是れ増上縁なり。謂く、彼の彌㉕陀、増上縁と爲りて其の勝業を成ぜしめて、浄土に往生せしむ。而も此の生に於て定㉖んで見佛することを得。故に経に説きて㉗（四丁右）「一日七日具足して念ずるが故に、是の人必ず阿彌陀如來を覩る[17]」と言ふ〈云云〉。卽ち佛力に由りて定んで往生を得。故にまた名づけて縁決定と爲すなり。故に導和尚『觀經』に依りて云く、「滅後の凡夫、佛の願力に乘じて定んで往生を得[18]」と〈經に「正しく未来世一切の凡夫の爲にす[19]」と云ふなり〉。

此の三決定、義を攝すること周盡す。又此の三を分けて更に十門と爲す。

一には依報決定。〈安樂國土、是れ清淨なりと雖も、事相麤淺なるをもつて猶ほ[20]下品と名づく。諸の願求すること有るもの、決定して往生すべし。〉

二には正果決定。〈西方の衆生、身色妙なりと雖も、化生すること天の如し。また胎宮有り。諸の願

必ず成就することができる」と〈云云〉。これは観想してこの生涯で〔往生の業を〕成就することを明らかにしている。定善でさえ現にその通りである。まして散善はいうまでもない。

次に縁を明らかにするというのは、これは増上縁である。つまりかの阿弥陀仏は増上縁となってそ〔の行者〕の勝れた行いを成就させて、極楽浄土へ往生させる。しかも現世において必ず仏の姿を見ることができる。ゆえに経に説いて「一日、七日、欠くことなく念じるゆえに、この人は必ず阿弥陀如来を見る」〈云々〉という。すなわち仏の力によって必ず往生ができる。であるからまた縁決定と名づけるのである。ゆえに善導和尚は『観経』に依っていう。「〔釈尊〕滅後の凡夫は仏の願力によって必ず往生ができる」と〈経には「まさしく未来世の一切の凡夫のためにする」と説かれている〉。

これら三決定は、意味を含み込むことが完全である。またこれら三つを分けてさらに十部門とする。

第一には依報決定。〈極楽浄土は清浄であるとはいっても、具体的なありさまは粗末であるからなお下品と名づける。諸々の往生を求める者は、必ず往生できる。〉

第二には正果決定。〈西方浄土の衆生は身体の色が勝れているとはいっても、化生するのは〔娑婆の〕天界の如くである。また

㉘浄「若有」

㉙寛浄「定業」

㉚寛大浄「係」

求すること有るもの、決定して往生すべし。〉

三には昇道決定。〈安樂㉘の衆生、是れ不退なりと雖も、久久に花開きて始めて道心を發す。諸の願求すること有るもの、決定して往生すべし。〉（四丁左）

四には種子決定。〈浄土に往生すること宿善㉙に依ると雖も、適たま彌陀を聞く。要ず德本有り。諸の願求すること有るもの、決定して往生すべし。〉

五には修因決定。〈三昧正受、易からざるに似たりと雖も、系㉚想すれば必ず成ず。況や口に名を稱へんをや。諸の願求すること有るもの、決定して往生すべし。〉

六には除障決定。〈生死の凡夫、三障重しと雖も、念佛三昧、偏く諸障を治す。諸の願求すること有るもの、決定して往生すべし。〉

七には事縁決定。〈娑婆の五濁、甚だ畏るべしと雖も、處、出離に順じ、時、彌陀に契ふ。諸の願求すること有るもの、決定して往生すべし。〉

八には弘誓決定。〈凡夫淺薄にして自力劣なりと

胎宮がある。諸々の往生を求める者は、必ず往生できる。〉

第三には昇道決定。〈極楽の衆生は不退であるとはいっても、長い時間をかけ花が開いて後初めて道心をおこすのである。諸々の往生を求める者は、必ず往生できる。〉

第四には種子決定。〈浄土に往生することは宿善に依るとはいえ、たまたま阿弥陀仏の教えを聞くことができた。必ず功德がある。諸々の往生を求める者は、必ず往生できる。〉

第五には修因決定。〈三昧正受は簡単ではないように見えるが、思いを向けると必ず成就する。まして口に阿弥陀仏の名を称えるならばなおさらである。諸々の往生を求める者は、心ず往生できる。〉

第六には除障決定。〈輪廻する凡夫は、煩悩障、業障、報障の三障が重いとはいえ、念仏三昧は広くこれら諸々の障害を対治する。諸々の往生を求める者は、必ず往生できる。〉

第七には事縁決定。〈娑婆世界の五濁は、非常に恐れるべきであるとはいえ、〔環境としての〕場所は出離に役立ち、時代は阿弥陀仏の救済に適している。諸々の往生を求める者は、必ず往生できる。〉

第八には弘誓決定。〈凡夫は〔智慧や修行が〕浅く、自力は劣

雖も、佛願力に乘ずれば、生死渡り易し。諸の願求すること有るもの、決定して往生すべし。〉

九には攝取決定。〈衆生の身心、是れ怯弱なりと雖も、威神の光明、攝取して捨てたまはず。諸の願求すること有るもの、決定して往生すべし。〉

十には圓滿決定。〈稱名念佛は、是れ一行なりと雖も、諸佛護念するをもつて衆具圓滿す。諸の願求すること有るもの、決定して往生すべし。〉

初めの三は是れ果、次の三は是れ因、次の三は是㉛れ緣、後の一は是れ總㉜なり。

（五丁右）第一に依報決定とは、西方に世界有り。名けて極樂と曰㉝ふ。七寶嚴淨に、五塵殊妙なり。[21]阿彌陀佛、願力の持する所、世俗凡夫の淨業の生ずる處なり。一師は名けて「凡夫事の淨土」[22]と曰㉞ひ、一師は名けて「凡聖同居の土」[23]と爲す。土は[24]清淨なりと雖も、猶ほ是れ麤淺なり。大いに此の界の諸天の所居の如し。但だ有佛・無佛を以て異と爲す。故に諸の凡夫、佛を見たてまつらんが爲の故に淨業を修する者は、皆往生を得。故に『觀經の疏』に云く、〈嘉祥〉「華嚴に辨ずる所の如き、百萬阿僧祇品[25]の

㉛大淨「爲」
㉜寛淨「惣」
㉝寛大淨「云」
㉞寛淨「云」

っているとはいえ、仏の願力に乘じると、輪廻は渡りやすい。諸々の往生を求める者は、必ず往生できる。

第九には摂取決定。〈衆生の身心は弱々しいとはいえ、阿弥陀仏の、威力ある光明は摂取してお捨てにならない。諸々の往生を求める者は、必ず往生できる。〉

第十には円満決定。〈称名念仏は、一つの行であるとはいえ、諸仏が護念することによって〔後に〕あらゆる手段が円満となる。諸々の往生を求める者は、必ず往生できる。〉

〔以上、十決定のうち、〕初めの三つは果であり、次の三つは因であり、次の三つは縁である。最後の一つは総（まとめ）である。

第一に依報決定についていうと、西方に世界がある。名づけて極楽という。七宝は美しく清らかで、五種の感覚の対象はことのほか勝れている。阿弥陀仏の本願力に依って保持されている所であり、世俗の凡夫の浄業によって生まれるところである。ある師は「凡夫の往生する具体的事物からなる浄土」といい、またある師は「凡聖同居の土」（凡夫と聖者とが混在する国土）とする。その世界は清浄であるがやはり粗末で劣った場所である。あらまし娑婆世界の諸天の住みかと変わらない。ただ仏がおられるか、おられないかが異るだけである。ゆえに諸々の凡夫が阿弥陀仏の姿を拝見するために浄業を修めれば皆往生できる。ゆえに、『観

㉟底「是」㊥欠く。
㊱底「是」寛浄欠く。
㊲大「＋既是下品」
㊳底「往」寛大浄欠く。
㊴底「耶」寛大浄欠く。
㊵底「土」大欠く。
㊶底「也」寛浄欠く。
㊷寛「尒」

浄土に、西方の彌陀は是㉟れ最も是㊱れ下品なり㊲。何が故ぞ往㊳生を願ずるや㊴。解して云く、始めて（五丁左）穢を捨てて浄に入るに、餘の浄土㊵は易く階るべからず。是の因縁によつて唯だ西方浄土に往生することを得るなり[26]」と。〈已上〉

此れ韋提希、金臺[27]の内に現ずる所の十方の諸の浄土の中に於て、唯だ極樂を取ることは、階るべきこと易きを以ての故なりといふことを明す。

又『義記』に云く、〈浄影〉「彌陀佛國は浄土の中の麤なり。更に妙刹有り。此の經に説かず[28]」と。〈云云〉又鸞法師・綽禪師等、皆凡夫往生の浄土と習ひ、竝びに事相麤淺の處[29]と許す㊶。

問ふ。若し爾㊷らば、何が故ぞ『雙卷經』に佛の本願を説きて、「我が作佛の國土をして第一ならし

経義疏』〈吉蔵〉にいう。「『華厳経』に論じられる所によれば、数多くある浄土の中でも西方の阿弥陀仏の浄土は最も位の低いものである。どうして往生を願うのか。解釈していう。はじめて娑婆世界を捨てて浄土に往生するのに、阿弥陀仏の極楽浄土以外の浄土には簡単に昇って行くことはできない。この根拠によってただ阿弥陀仏の西方浄土に往生することができるのである」と。〈以上〉

この〔吉蔵の解釈は〕韋提希が金の台の中に現われた十方の浄土の中から、ただ極楽浄土を選び取ったのは、往生がしやすいからであるということを明らかにしている。

また、『観経義疏』〈浄影寺慧遠〉にいう。「阿弥陀仏の極楽浄土は浄土の中で位の低いものである。さらに優れた浄土があるが、この経（『観経』）には説かれていない」と。〈云々〉また曇鸞法師・道綽禅師等〔の先学は〕皆、凡夫が往生する浄土と学び、また具体的な事物からなる劣った場所であると認めている。

【問】問う。もしそうなら、どうして『無量寿経』に阿弥陀仏の本願を説いて、「私が仏になって構える浄土を、〔諸の浄土の中

めん。其の衆奇妙に、道場超絶し、國、泥洹[30]の如くにして而も等雙無からん[31]」と云ひ、又（六丁右）彼の國土の相を説きて、「微妙奇麗、清淨の莊嚴、十方に超踰せり。一切世界の衆寶の中の精なり[32]」と云ふや。〈云云〉經説既に爾㊸なり。何ぞ最劣と云ふや。

㊸㊐「尒」

答ふ。諸の凡夫の事の淨土の中に於て、安養國土㊹、最も殊勝と爲す。若し諸餘の純聖の佛國に望めば、還りて是れ下劣なり。故に相違せず。

㊹㊀「國土」
㊐㊔欠く。

問ふ。經に彼の土の莊嚴の相を説きて云く、「金剛の七寶の金幢[33]、瑠璃の寶地を擎げ[34]、柔耎摩尼の水流れて[35]、衆寶の蓮華に敷き[36]、七重行樹の上には三千界の佛事を現じ[37]、衆寶羅網の間には五百億の宮殿を連ね[38]、金繩の界道には妙華、地に敷けり。天鼓自ら（六丁左）擊ち、衆鳥哀鳴し、樹、五音を出し、波、四忍[39]㊺を唱ふ。聞く所は皆妙法の音、聞くに隨ひて迷ひを除き、見る所は皆清淨の色。見る毎に悟りに進む。國界廣博にして限量有ること無く、常然にして衰ふること無し。冬夏變ぜず。又應法の妙服は、求めざるに膚に在り。微妙の上膳、自然に意に隨

㊺㊐㊔「恩」

で〕第一のものにしましょう。そ〔の浄土〕の衆生はたいへん優れており、覚りの座もまた優れ、国は覚りの境地のようで、二つとないものとしましょう。」といい、またかの浄土のありさまを説いて、「量り知れないほど美しく、清らかな飾りは十方の仏の世界に勝っている。あらゆる世界の宝のなかで最上のものである。」というのか。〈云々〉経典には現にこのように説かれている。どうして最も劣っているなどというのか。

【答】答える。凡夫の往生できる、具体的な事物からなるあらゆる浄土の中では極楽浄土が最も優れている。もしその他の聖者のみの浄土と対比するならば、かえって劣った所となる。ゆえに、〔我々の主張は、この経典の文言〕と矛盾しない。

【問】問う。かの極楽浄土の荘厳のありさまを説いていう。「たいへん固い七つの宝でできた宝幢が、瑠璃の大地を支え、柔らかな宝の水が流れ、多くの宝が蓮華に覆われて、七重の並木の上には三千大千世界の仏のはたらきを現し、宝の網の間には五百億の宮殿を連ねて、金の縄でできた道には美しい華が地面に敷かれている。天の太鼓は自ら鳴り、鳥たちは哀しげに鳴き、樹は五つの音階を奏で、波は四忍を唱える。聞こえるものはすべて深い教えの音声で、聞くごとに〔人々は〕迷いを取り除き、見えるものはすべて清浄の色で、見るごとに〔人々は〕悟りに進む。国の範囲は広大であって際限がなく、常に変わらず衰えることはない。冬や夏といった変化がない。また教えに応じたすばらしい服は求

ふ[40]」と。此の如きの奇妙の勝境、更に凡下の分齊に非ず。取相の凡夫、豈に能く其の處に叶はんや。具縛の異生㊻、何ぞ忽に其の地を踐まんや。

㊻㊦「生」寛浄欠く。

答ふ。生死の凡夫、本よりこのかた久しく清浄の妙境を受く。上の諸天等の如し。何ぞ國土の殊妙を以て、忽に具縛の凡夫を隔てん。彼の北㊼鬱單（七丁右）越[41]の自然の五塵の如き、亦た是れ人間の福報なり。豈に自然なるを以て凡夫の所用に非ざるべけんや。況や復た修羅の寶臺・玉牀、色鮮やかに、諸龍の宮殿・金柱、光を流ふ。雜業の小福、尚ほ以て此の如し。況や純浄の意樂をや。況や求出の善根をや。

㊼㊦「北」寛浄欠く。

夫れ西方の浄業は、彌陀無漏の法身、法蔵比丘の清浄の本願に依託して起る㊽。所以に是れ凡愚の所行なりと雖も、其の性、清浄なり。下劣の人の所修なりと雖も、其の用を起すこと廣大なり。

㊽㊦「之」寛浄欠く。

『觀經の疏』に云く、「此の三種の因、皆是れ浄心

めずして身に着く。この上なく美味な食物は自然に心に適う」と。このようなすばらしく勝れた対象は平凡で劣った者が手に入れるようなものではない。対象の特徴にとらわれる凡夫がどうしてそのような場所にふさわしいであろうか。煩悩に縛られた凡夫が、どうしてすぐにその地を踏めようか。

【答】答える。輪廻を繰り返す凡夫も、昔からこれまで永い間清浄なすばらしい感覚の対象を享受してきた。例えば上級の神々等のようなものである。どうして国土の有り様が勝れているからといって、たちまちに煩悩に縛られた凡夫を分け隔てすることがあろうか。たとえば、かの北倶盧洲の自然の五種の感覚の対象もまた人間の善行の報いである。どうして自然であるからといって凡夫に享受されないはずがあろうか。ましてまた修羅の宝の台座や玉の床は色が鮮やかで、諸の龍の宮殿や金の柱は、光をゆきわたらせる。雑多な善行の小さな福徳でさえこの通りである。まして汚れのない清らかな心構えなら当然である。まして輪廻の苦しみから逃れようとしてつくる善根なら当然である。

さて、極楽往生のための清らかな行は、阿弥陀仏の汚れのない法身と、法蔵比丘の清浄な本願を拠り所として起こる。ゆえに、これは凡庸で愚かな人の行いではあるが、その性質は清浄である。下劣の人の修行ではあるが、それが起こす働きは広大である。

〔吉蔵の〕『観経義疏』にいう。「この三種類の原因は、すべて清

なり。孝養父母、此の心亦た淨なり。乃至、（七丁左）發菩提心亦た淨なり。此の三種の心、皆是れ淨なるを以ての故に、土も亦た淨なることを得。」所以に『維摩』に云ふ。「其の心淨なるを以ての故に、佛土も淨なり。」[42][43]〈云云〉三心既に淨なれば、卽ち清淨人なり。既に是れ清淨の衆生なり。故に卽ち清淨の處に生ずることを得。然るに彼の國土の五塵諸境、惑を滅し、道を生ずることは、本と修因の時、出世を樂求するを以ての故に、土を得るの時、能く出世に順ず。

まさに知るべし。因を出世と名づく。求出の善なるが故に土を勝過と稱す。〈『往生論の偈』に云く、「三界の道に勝過す」[44]と。〉是れ相似の菩提なればなり。〈『義章』[45]の意なり。〉

問ふ。此の界の諸天、是れ嚴淨なりと雖も、佛の淨土に非ず。西方の淨土は既㊾に是れ佛刹なり。何ぞ（八丁右）一類することを得んや。

答ふ。三界の衆生、穢土の中に於て亦た佛を見ることを得。亦法を聞くことを得。何ぞ佛有るを以ての故に生ずることを得ずと云はんや㊿。故に知んぬ。

㊾寛淨「已」

㊿寛淨「乎」

らかな心である。孝養父母、この心はまた清らかである。ないし、発菩提心もまた清らかである。この三種の心は清浄であるから浄土もまた清らかであることを得る。ゆえに『維摩経』にいう。《その心は清らかであるから、仏土も清らかである》」と。〈云々〉三心は現に清らかであるから、すなわち清浄な人である。現にこれは清浄な衆生である。ゆえに、すなわち清浄な所へ生まれることができる。ところで彼の国土の五種の感官の対象が、煩悩を滅し、覚りの智慧を生ずることは、かつて極楽往生のための行を修めていた時、解脱を願い求めていたので、極楽往生した時、解脱の助けとなるのである。

以下のように理解せよ。因を出世と名づける。〔輪廻の苦しみから〕抜け出るための善だから極楽国土をすぐれ勝ったものと称する。〈〔世親〕『往生論偈』（無量寿経優婆提舎願生偈）には「三界の道にすぐれ勝る」という。〉これは菩提に似たものだからである。〈〔浄影寺慧遠〕『大乗義章』の趣旨である。〉

【問】問う。この娑婆世界の諸天は、煌びやかで清らかであるが、仏の浄土ではない。西方の浄土は明らかに仏の国土である。どうして同類のものとできようか。

【答】答える。三界の衆生も、穢土の中においてまた仏を見ることができる。また教えを聞くことができる。どうして仏がおられるからといって「往生することが出来ない」などといえようか。

凡夫、世福の業を以て、浄土に生ぜんと願ずれば、因果相順し、佛身を見んと求むれば亦果遂することを得。

問ふ。同じく七寶と雖も、寶㊶に精麤有り。修羅の宮殿を以て、西方の浄土に同ずべからず。俱に佛を見ると雖も、佛に優劣有り。云何ぞ世人、忽に彼の八萬四千の㊷妙相を見ることを得んや。

答ふ。『雙卷經』に云く、「其の寶猶ほし第六天の寶の如し[46]」と。『無量壽會』に云く、「宮殿園林、衣服飲食、香花瓔珞、譬へば他化自在の（八丁左）諸天の如し。[47]」〈云云〉

文既に此の如し。何ぞ必ずしも超然たらん。尚ほ梵世に及ばず。何ぞ崖に望みて自絶せんや。但だ樹、法音を演べて聖道を出生せしむることは、蓋し願求の異に由るのみ㊸。又佛力に由りて、然ら使むるが故㊹なり。又浄土なるが故に、佛身殊勝なり。何ぞ相好の殊勝なるを以て、必ず凡の所見に非ずといはんや㊺。又經に云く、「阿彌陀佛の化身無數」と。若し爾㊻らば初生には、先づ化佛の相好の麤淺なるを見るべし。類せば釋迦の如し。故に『般舟三昧

㊶底「寶」㊽㊾欠く。
㊷底「之」㊽㊾欠く。
㊸㊽㊾「乎」
㊹底「故」㊽㊾欠く。
㊺㊽㊾「乎」
㊻㊽「尒」

ゆえに知る。凡夫は、世間的な功徳によって、浄土に生まれたいと願えば、因と果が適合し、仏の身体を見たいと求めれば、また〔その願いは〕遂げられる。

【問】問う。同じく七宝ではあるが、宝にも精妙なものと粗末なものがある。修羅の宮殿を西方の浄土と同じものとしてはならない。どちらの世界でも仏を見ることはできるが、仏にも優劣がある。どうして世の人々が、たちまちのうちに仏の八万四千の優れた身体的特徴を見ることができようか。

【答】答える。『無量寿経』にいう。「その宝は〔娑婆世界の〕他化自在天の宝のようである」と。『無量寿会』にいう。「宮殿、園林、衣服、飲食物、香や花、瓔珞は、例えば〔娑婆世界の〕他化自在天のようである」と。〈云々〉

経文は現に以上の通りである。どうして必ずしも〔極楽が娑婆世界を〕超えたものであろうか。色界の諸天にも及ばない。どうして切り立った崖を仰いで自ら諦めてよいだろうか。ただ、樹木が教えの音声を発してけがれのない覚りの知恵を生み出すことは、思うに、〔娑婆世界とは〕願い求める心が異なっているからである。また、仏の〔本願〕力によってそのようであるからである。また、浄土であるから仏の身体は特に優れている。〔けれども〕相好が特に優れているからといって、どうして必ずしも、「凡夫に見られない」などといえようか。また『観経』〔第十三観〕に

經』に云く、「彼の佛に三十二相有り」[48]と。〈『賢護經』、これに同じ㊼。〉又蓮華胎宮の中に於て光明を見ると雖も、餘相を覩ず。故に佛の淨土と雖も、常没の人（九丁右）亦往生を得るに、妨げあるべからず。

㊼㊞「賢護経同之」㊝㊟欠く。

迦才の云く、「是れ法王なりと雖も、衆生を化せんが爲の故に五濁に來遊す。亦是れ凡夫なりと雖も、佛を供養せんが爲の故に淨土に生ず。此の理明らかなり。又彼の淨土は、只是れ諸佛の慈悲方便をもつて、別して一方の處所を料理して、女人及び五欲の境界を除卻す。是れ化生の處にして極妙に非ず。猶ほし城邑の中に於て、別して一所を料理して用て伽藍を作り、其の俗事を除去し、僧をして道を修せしむるに、但だ衆生有りて伽藍に入れば、悉く善心を發すが如し。彼も亦是の如し」[49]〈云云〉。

良に以れば、安養は正しく凡夫修善の生處に當る。故に經[50]に（九丁左）説きて言く、「其の國、違逆せず」と。〈『雙卷經』なり〉。『義記』に釋して云く、「不違と言ふは、其の易往を彰はす[51]」と〈云云〉。意の云く、凡夫の人、往生の因を修するに、彼の國

いう。「阿弥陀仏の化身は無数である」と。もしそうなら、生まれたばかりの者はまず化仏の相好の粗末な様を見るだろう。〔穢土の〕釈迦と同様である。ゆえに、『般舟三昧経』にいう。「かの阿弥陀仏に三十二相がある」と。〈『賢護経』もこれと同様である。〉また、蓮華胎宮の中で光明を見るとはいっても、他の相は見ることができない。ゆえに仏の浄土とはいっても、常に迷いの世界に沈んでいる人も往生を得るのに妨げがあるはずはない。

迦才がいう。「教えの王である仏であっても、衆生を教化するために五濁〔の世〕に出現する。また凡夫であっても、仏を供養するために浄土に生まれる。この道理は明らかである。またかの〔阿弥陀仏の〕浄土は、諸仏の備える慈悲と方便によって、特別に一つの場所を設け、女人や五種の欲望の対象が取り除かれている。これは化生するところであって極めて優れている訳ではない。例えば都城のなかにおいて、特別に一つの場所を整えて伽藍を作り、世俗的な事柄を取り除き、僧侶に修行をさせると、衆生がその伽藍に入るのみで皆ことごとく善い心を起こすようなものである。阿弥陀仏の極楽浄土も同様である。」〈云々〉

よく考えてみれば極楽浄土は、凡夫が善行によって生まれる処である。ゆえに経に説いていう。「その国は、背くことはない」と。〈『無量寿経』である〉。〔浄影寺慧遠の〕『無量寿経義疏』において解釈していう。「背かないというのは、その極楽往生がし易いことを表す」と。〈云々〉意味をいえば、凡夫は、往生の原

土、其の修因に順じて之を得べきこと易し。故に不違を以て其の易往を彰す。經に云く、「往き易くして人無し[52]」と。

問ふ。經に言㊽く、「往生の人、勝㊾計すべからず[53]」と。而るに今復た「無人」と言ふは何ぞや。又卽ち此の中に既に「易往」と言ふ。何ぞ復た「無人」といふや㊿。

答ふ。『義記』に解して云く、「往生する者、尠し。故に無人と曰ふ[54]。」意の云く、若し理に任せて而も言はば、一切生ずべし。其の修因是れ極めて劣なるを以ての故に。故(61)に、「易往」と云ふ。而るに衆生有りて（十丁右）其の因を修せざれば、卽ち生ずることを得ず。其の道理に望むれば、一切生ずべし。生ずる者、便ち少きが故に「尠」と言ふ。

㊽寛大浄「云」
㊾大「稱」
㊿寛「殘」
(61)底「故」寛浄欠く。

因を修めるときに、かの極楽浄土は、〔そこへ〕往生するための修行に従って、得ることが容易である。ゆえに「背かない」〔という表現〕によって往生し易いことを表している。『無量寿経』にいう。「往生は容易であるがそのような人がいない」と。

【問】問う。経にいう。「往生する人は、数えきれない」と。ところが今また「人がいない」と言うのはどうしてか。またすなわちこの中で明らかに「往生が容易である」といっている。どうしてまた「人がいない」というのか。

【答】答える。『義記』に解釈していう。「往生する者が少ない。ゆえに人がいないというのである」と。意味するところは、もし、道理に任せていえば一切往生ができる。その修行は極めて容易であるからである。ゆえに「往生が容易である」という。ところが衆生がその往生の因を修行しなければ、すなわち往生ができない。その道理を念頭に置けば、一切往生できるが、往生する者が少ないから「少ない」というのである。

註

(1) 「ともがら」と読む。

(2) 浄影寺慧遠『無量寿経義疏』（『大正蔵』三七・一一六頁上二六行〈坂上〉・『浄全』五・五五頁上一～二行）

『決定往生集』では、浄影寺慧遠の『無量寿経義疏』・『観無量寿経義疏』を『義記』と示す傾向が見られる。これは吉蔵・善導等と判別するためであろう。

(3) 基（慈恩大師）『西方要決』（『大正蔵』四七・一〇九頁上十九～二〇行〈坂上〉・『浄全』六・五九二頁下八行）

(4) 「方」を「まさに」と読んだ。「ちょうど、そのときに、いま」の意。

(5) 『称讃浄土仏摂受経』（『大正蔵』一二・三五一頁上一四・二二行〈坂上〉・『浄全』一・一九〇頁上一六行・下六行）

(6) 『観無量寿経』（『大正蔵』一二・三四三頁上一六・『浄全』一・四三頁一行）

(7) 馬鳴『大乗起信論』（『大正蔵』三二・五八三頁上一七～一九行〈坂上〉）

(8) 底本では「昇冂」であるが、訓読では「昇り」とした。

(9) 底本では「自ラ」は「みずから」と読んだ。

(10) 『大方広仏華厳経疏』（『大正蔵』三五・八五九頁上五行）、『大乗稲芋経随聴疏』（『大正蔵』八五・五四四頁上二八行）等に「内外縁起」の文言が確認できる

(11) 「しりぞくる」と読む。

(12) 『観無量寿経』（『大正蔵』一二・三四二頁上二八～二九行〈坂上〉・『浄全』一・四〇頁一二～一三行）

(13) 『鼓音声経』（『大正蔵』一二・五三五頁上二一～二二行〈坂上〉）

(14) 『宝積経』（『大正』一一・九八頁上一四～一五（坂上））

(15) この一節では、「業成」つまり業の果が約束（成就）されたことを述べている。

(16) 『観無量寿経』（『大正蔵』一二・三四四頁上二七～二八行〈坂上〉・『浄全』一・四六頁八行）。源信『往生要集』（『大正蔵』八四・五六頁中一一～一二行・『浄全』一五・八五頁下一三～一四行）に同様の引文有り。

(17) 『大集経』（『大正蔵』一三・八七五頁下一六～一七行）に「如是或至七日七夜。如先所聞具足念故。是人必観阿彌陀如來應供等正覺也。」とある。

(18) 善導『観念法門』（『大正蔵』四七・二七頁下二～三行〈坂上〉・『浄全』四・二三四頁上一三行）

(19) 『観無量寿経』（『大正蔵』一二・三四一頁下七行・『浄全』一・三九頁六行）

(20) 底本では「ヲ」となっているが読み替える。

(21) 源信『往生要集』巻上、大文第二「欣求浄土」第五「五妙境界」にある。

(22) 浄影寺慧遠『大乗義章』（『大正蔵』四四・八三四頁上二四行～八三五頁中一三行）には、浄土の相に関して、一、事浄土・二、相浄土・三、真浄土を立てている。浄土宗七祖聖冏は、『釈浄土二蔵義』（一三八五年著）（『浄全』一二・一八頁下一四～一五行）において、浄影寺慧遠が『大乗義章』で、一、事浄土・二、相浄土・三、真浄土を立て、事浄土をさらに有漏心浄土・出善根浄土の二つに細分すると指摘している。

(23) 吉蔵『大乗玄論』（『大正』四五・六七頁上一四行）

坂上は、「珍海の浄土観」（『印度学仏教学研究』第二六巻第一号、一九七七年）一九五頁において凡夫事浄土、凡聖同居土について、浄影寺慧遠『大乗義疏章』と、智顗『観経疏』の説示であることを指摘している。恵谷隆戒は、「安養知足相対抄に就いて」（『専修学報』第二号、一九三四）において、『決定往生集』に示される浄土往生思想を、「浄土を化土と判じ麁浅の土と考えたことや、往生を化生胎宮と判じたことは尚彼の思想が、浄影嘉祥等の学説に固執していた結果により発ったものである。」と指摘している。坂上「珍海の浄土観」（前掲）

においても同様の指摘がなされている。

(24) 原文に送り仮名「は」は無いが、ここでは記した。

(25) 阿僧祇：「無数」という梵語「アサンキャ」の音写。

(26) 吉蔵『観経義疏』（『大正蔵』一二・二四一頁上二三～二六行〈坂上〉・『浄全』五・三四一頁下八～一一行）

(27) 『観無量寿経』（『大正蔵』一二・三四一頁中二二～二三行・『浄全』一巻三八頁一三行）に「化爲金臺如須彌山」とあり。

(28) 浄影寺慧遠『観経義疏』（『大正蔵』三七・一八二頁下七～八行〈坂上〉・『浄全』五・一九一上一六～一七行）。良忠『観経疏伝通記』（玄義分）（『浄全』二・一七一頁上一二～一三行）にも同様の引文が確認できる。

(29) 道綽は『安楽集』上（『浄全』一・六七八頁上五～八行）において、「第八明彌陀淨國位該上下、凡聖通往者、今此無量壽國是其報淨土。由佛願　故乃該通上下。致令凡夫之善竝得往生。由該上故、天親龍樹及上地菩薩亦皆生也。」と述べ、凡夫も聖者も往生できるところであるとしているが、極楽浄土を麁浅の処とする説示は確認できない。曇鸞も『往生論註』で、凡夫往生の浄土と捉える説示は散見されるが、麁浅とする内容は確認できない。

(30) 涅槃の異訳。

(31) 『無量寿経』（『大正蔵』一二・二六七頁中一〇～一二行〈坂上〉・『浄全』一・五頁一〇行）

(32) 『無量寿経』（『大正蔵』一二・二七〇頁上一〇～一一行〈坂上〉・『浄全』一・一二頁一三行）

(33) 『観無量寿経』第二水想観。（『大正蔵』一二・三四二頁上六～一九行・『浄全』一・四〇頁四～九行）

(34) 同右

(35) 『観無量寿経』第五宝池観。（『大正蔵』一二・三四二頁中二四行～下五行・『浄全』一・四一頁九～一三行）

(36) 『観無量寿経』第七華座観。（『大正蔵』一二・三四二頁下一四行～三四三頁上一四行・『浄全』一・四二頁三行～四三頁一行）

(37) 『観無量寿経』第八像想観。（『大正蔵』一二・三四三頁上一八～中一四行・『浄全』一・四三頁二行～一二行）

(38) 『観無量寿経』第六宝楼観。（『大正蔵』一二・三四二頁下六行～一三行・『浄全』一・四一頁一四行～四二頁二行）

(39) 四忍：菩薩が持する四つの忍。すなわち、一切の存在の自性が本来空であると知る無性法忍。一切が本来不生不滅であると知る無滅忍。一切は因縁の和合によって生じた本来自性のないものであると知る因縁忍。一切は本来心に留め著してはならないものであると知る無住忍。

(40) 『観無量寿経』（註35～38参照。）からの文言を取意、要約したものであろうか。

(41) 第八海の北方の人間の住む大陸。

(42) 底本では「淨ト也」とあるが、「淨也」と訂正した。

(43) 吉蔵『観経義疏』（『大正蔵』三七・二四一頁下二七～二四二頁上二行（坂上）・『浄全』五・三四三頁上九～一二行）。経典としては『維摩詰所説経』『大正蔵』一四・五三八頁下五行（坂上）

(44) 曇鸞『無量寿経優婆提舎願生偈』（『大正蔵』二六・二三〇頁下二一行（坂上）・二三〇頁下二一行・二三一頁下九行）にも「過三界道」の文言がある。

(45) 慧遠『大乗義疏』（『大正蔵』四四・八三四頁中九行〈坂上〉）

(46) 『無量寿経』（『大正』一二・二七〇頁上一一～一二行（坂上）・『浄全』一・一二頁一三～一四行）

(47) 『大宝積経』（無量寿如来会）（『大正蔵』一一・九七頁上二七～二九行〈坂上〉・『浄全』一・一五四頁下四～五行）

(48) 『般舟三昧経』（『大正蔵』一三・八九九頁中二行）

(49) 迦才『浄土論』（『大正蔵』四七・一〇二頁下二九～一〇三頁上七行〈坂上〉・『浄全』六・六六八頁下一二～六六九頁上一行）

(50) 『無量寿経』（『大正蔵』一二・二七四頁中二四行〈坂上〉・『浄全』一・二四頁六行）

(51) 慧遠『観経義疏』には該当箇所確認できず。

(52) 『無量寿経』（『大正蔵』一二・二七四頁中二三～二四行〈坂上〉・『浄全』一・二四頁六行）、浄影寺慧遠『無量寿経義疏』（『大正蔵』三七・一一二頁上七行・『浄全』五・四六頁上二行）、吉蔵『無量寿経義疏』（『大正蔵』三七一二三頁中一五行・『浄全』五・七〇頁下一三行）、吉蔵『観経義疏』（『大正蔵』三七・二三五頁上一一行・『浄全』五・三二八頁上一三行）、源信『往生要集』（『大正蔵』八四・四七頁中一七行・『浄全』一五・六七頁上一三行）、永観『往生拾因』（『大正蔵』八四・九七頁上九行・『浄全』一五・三八三頁下五～六行）等にも「易往而無人」の語が確認できる。

(53) 『無量寿経』（『大正蔵』一二・二七八頁下一九～二〇行〈坂上〉・『浄全』一・三五頁八行）

(54) 慧遠『観経義疏』（『大正蔵』三七・一一二頁上八行）。珍海『安養知足相對抄』（『大正蔵』八四・一一八頁中一二～一四行）に類似した引文が確認できる。

（はっとり　じゅんけい　学術研究員、佛教大学大学院）

決定往生集

沙門珍海撰

言決定往生者是淨教之宗旨也夫西方淨土之道經論同開稱念彌陀之行愚智俱從良以契時稱機故耳然或知而不趣或趣而莫進卽如予之流也豈其可不痛乎所以今者考尋文理將流疑滯欲安心於決定往生決期於終爲來迎矣當知世俗凡夫修念佛

南都仏教図書館

（1丁右）

行從此卽生安樂世界如云明今聞經有求去者定得往生莫自疑慮（淨影雙卷經義記中）又言上盡現生一形下至臨終十念俱能決定皆得往生（慈恩要決）凡披卷看文無不云決定往生西方行者不可不知方今以三事示其決定一教文二道理三信心此謂三也初教文者稱讚淨土經說稱名利益云一切定生無量壽佛極樂世界觀無量壽經說想觀利益云必

定當生極樂世界又起信論引經云若人專
念西方極樂世界阿彌陀佛即得往生云云既
云決定勿復猶預又言即生必非別時又三
輩九品並云即生彼國由此應知經之與論
皆說從此決定往生教文雖多粗示二三耳
次其道理者夫善惡兩道猶如反掌仰則昇
寶刹覆則入泥犂良以衆生自有出離之分
淨土正是引物之方若言凡愚卑劣不堪往

（2丁右）

生者則衆生終無出離之期諸佛便闕引物之功定知依教願生必得往生又生有九品何自憚下劣乎因言十念莫更致怯弱矣因小果大是内外縁起之常理也何不以一日之修因生七珍之淨土乎又復諸法皆有勢分如火燒水浮及呪藥除病光明卻闇等也佛大悲願力自有舉沈重衆生之功豈其可疑哉道理如此其信心者若於如上文理之

（2丁左）

中心生信受即名決定以決定者爲信相故
故觀經云必生淨國心得無疑已上無疑即信
決定稱也又由信故必得往生故經說云若
能深信無孤疑者必得往生阿彌陀佛國鼓音聲經
由此應知下輩之人雖未一向專精信受
而由暫信亦得往生此乃信心決定義也於
此文義更有三種一果決定二因決定三緣
決定所言果者是淨土報謂凡夫人於順次

（3丁右）

生必定得生極樂世界故經說言發一念心念無量壽佛定生彼國（寶積經無量壽會文）如是等文皆說果決定次言因者是往生因謂淨土業若定若散卽於此身中定得成就故觀經云然彼如來宿願力故有憶想者必得成就云云此明想觀現身成就定善既爾何況散善次明緣者是增上緣謂彼彌陀爲增上緣成其勝業往生淨土而於此生定得見佛故經說

（3丁左）

言一日七日具足念故是人必覩阿彌陀如來云云即由佛力定得往生故亦名爲緣決定也故導和尚依觀經云滅後凡夫乘佛願力定得往生經正云爲未來世一切凡夫也此三決定攝義周盡又分此三更爲十門

一依報決定安樂國土雖是清淨事相麤淺猶名下品諸有願求決定往生

二正果決定西方衆生身色雖妙化生如天亦有胎宮諸有願求決定往生

三昇道決定安樂衆生雖是不退久久花開始發道心諸有願求決定往生

（4丁右）

四種子決定　往生淨土雖依宿善通聞彌陀要有德本諸有願求決定往生

五修因決定　三昧正受雖似不易系想必成況口稱名諸有願求決定往生

六除障決定　生死凡夫三障雖重念佛三昧徧治諸障諸有願求決定往生

七事緣決定　娑婆五濁雖甚可畏處順出離時契彌陀諸有願求決定往生

八弘誓決定　凡夫淺薄自力雖劣棄佛願力生死易渡諸有願求決定往生

九攝取決定　衆生身心雖是怯弱威神光明攝取不捨諸有願求決定往生

十圓滿決定　稱名念佛雖是一行諸佛護念衆具圓滿諸有願求決定往生

初三是果次三是因次三是緣後一是總

第一依報決定者西方有世界名曰極樂七寶嚴淨五塵殊妙阿彌陀佛願力所持世俗凡夫淨業生處一師名曰凡夫事淨土一師名爲凡聖同居土土雖清淨猶是麤淺大如此界諸天所居但以有佛無佛爲異故諸凡夫爲見佛故修淨業者皆得往生故觀經疏云嘉祥如華嚴所辨百萬阿僧祇品淨土西方彌陀是最是下品何故願往生耶解云始捨

穢入淨餘淨土不易可階爲是因緣唯得往生西方淨土也已上此明韋提希於金臺內所現十方諸淨土中唯取極樂者以易可階故下又義記云淨影彌陀佛國淨土中麤覆有妙剎此經不說云云又鸞法師綽禪師等皆習凡夫往生淨土並許事相麤淺之處也問若爾何故雙卷經說佛本願云令我作佛國土第一其衆奇妙道場超絕國如泥洹而無等雙又

說彼國土相云微妙奇麗清淨莊嚴超踰十
方一切世界衆寶中精云經說既爾何云最
劣答於諸凡夫事淨土中安養國土最爲殊
勝若望諸餘純聖佛國還是下劣故不相違
問經說彼土莊嚴相云金剛七寶金幢擎瑠
璃寶地柔耎摩尼水流敷衆寶蓮華七重行
樹之上現三千界之佛事衆寶羅網之間連
五百億之宮殿金繩界道妙華敷地天鼓自

（6丁右）

擊衆鳥哀鳴樹出五音波唱四忍所聞皆妙法音隨聞除迷所見皆清淨色每見進悟國界廣博無有限量常然無衰冬夏不變又應法妙服不求在膚微妙上膳自然隨意如此奇妙勝境更非凡下分齊取相凡夫豈能叶其處乎具縛異生何忽踐其地乎答生死凡夫從本以來久受清淨妙境如上諸天等也何以國土殊妙忽隔具縛凡夫如彼北鬱單

越自然之五塵亦是人間之福報也豈可以
自然非凡夫所用乎況復修羅寶臺玉牀色
鮮諸龍宮殿金柱流光雜業小福尚以如此
況純淨之意樂乎況求出之善根乎夫西方
淨業依託彌陀無漏法身法藏比丘清淨本
願而起之也所以雖是凡愚所行其性清淨
雖下劣人之所修起其用廣大觀經疏云此
三種因皆是淨心孝養父母此心亦淨乃至

（7丁右）

發菩提心亦淨以此三種心皆是淨故得土亦淨所以維摩云以其心淨故佛土淨也云云

三心既淨即清淨人既是清淨衆生故即得生清淨處也然彼國土五塵諸境滅惑生道者以本修因時樂求出世故得土之時能順出世應知因名出世求出善故土稱勝過往生論偈云勝過三界道是相似菩提也義章意也問此界諸天雖是嚴淨非佛淨土西方淨土既是佛刹何

得一類乎答三界衆生於穢土中亦得見佛
亦得聞法何以有佛故云不得生耶故知凡
夫以世福業願生淨土因果相順求見佛身
亦得果遂問雖同七寶寶有精麤不可以修
羅宮殿同西方淨土雖俱見佛佛有優劣云
何世人忽得見彼八萬四千之妙相乎答雙
卷經云其寶猶如第六天寶無量壽會云宮
殿園林衣服飲食香花瓔珞譬如他化自在

（8丁右）

諸天云云文既如此何必超然尚不及梵世何望崖自絶乎但樹演法音出生聖道者盍由願求異耳又由佛力使然故也又淨土故佛身殊勝何以相好殊勝必非凡所見耶又經云阿彌陀佛化身無數也若爾初生先見化佛相好麤淺類如釋迦故般舟三昧經云彼佛有三十二相賢護經同之又於蓮華胎宮之中雖見光明不覩餘相故雖佛淨土而常沒人

亦得往生不可妨也迦才云雖是法王爲化
衆生故來遊於五濁亦雖是凡夫爲供養佛
故生於淨土此理明矣又彼淨土只是諸佛
慈悲方便別料理一方處所除卻女人及五
欲境界是化生之處非極妙也猶如於城邑
之中別料理一所用作伽藍除去其俗事令
僧修道但有衆生入伽藍者悉發善心彼亦
如是云云良以安養正當凡夫修善生處故經

說言其國不違逆也雙卷經也義記釋云言不違者彰其易往云云意云凡夫之人修往生因而彼國土順其修因易可得之故以不違彰其易往也經云易往而無人也問經言往生之人不可勝計而今復言無人者何又即此中既言易往何復無人耶答義記解云往生者數故曰無人意云若任理而言一切容生以其修因是極劣故故言易往而有衆生不修

其因即不得生望其道理一切容生生者便少故言尠也

第二正果決定者大經三輩觀經九品並云行者臨命終時見佛來迎或見蓮華或夢中見佛或有不見者即於七寶池中蓮華之上自然受身於中勝者生即花開劣者不開此人或經五百歳或十二劫蓮華乃敷於華胎中受諸快樂如忉利天而不見佛亦不聞法

（10丁右）